

# グラムシ『獄中ノート』の主題構成

——『ノート』全容解明にむけて——

鈴木 富 久

キーワード：『獄中ノート』，知識人史，アメリカニズムとフォード主義，哲学，政治学

## はじめに

アントニオ・グラムシの『獄中ノート』（以下、『ノート』と略称する）<sup>1)</sup>の主題はいかなるところにあるのか。これは、一つの問題でありえよう。『ノート』の叙述は、驚異的なまでに多様かつ広範な主題、領域にひろがるが、それらを包括する一つないいくつかの主要な主題を見出すことができるか否か。見出しうるとすれば、それはいかなる主題か。これまで、こうした問いに対しては、中心的主題として「知識人論」が語られてきた。筆者と

---

1) Antonio Gramsci, *Quaderni del carcere*, Edizione critica dell'Istituto Gramsci, a cura di Valentino Gerratana, Giulio Einaudi editore, Torino, 1975. なお本稿で、Qは、この『獄中ノート』を、その次の数字は各冊のノート番号を、Sは各ノート内の覚書に記された番号（覚書番号）を表す。また、「Q10Ⅱ」等の場合、ローマ数字「Ⅱ」は、Q10内の第Ⅱ部であることを示す。覚書番号の次に記されたA, B, Cの記号は、Aは初稿、Bは初稿のみの稿、CはAの推敲稿であることを意味する。頁番号は、上記ジェルラターナ版のそれである。なお、引用句で、山崎功監修『グラムシ選集』（全6巻）合同出版、1961-65年、に邦訳のあるものについては、「合」でそれを表し、ローマ数字で巻数、次いで該当頁番号を示す。但し、訳文は同一と限らない。

してもそれを確認するのではあるが、しかし、そうだとすれば、他の諸テーマは総じて「周辺の」な位置づけにおいてあるということになるのか。あるいは、他にも主要と認められような主題が存在するのか。存在するとすれば、諸主題はいかなる関連にあるのか。

これら一連の問題の解決は、『ノート』の全体把握ないし全容解明にとっては避けられない重要問題の一つであろう。本稿の課題は、この全容解明の一環として、『ノート』の主要な主題の所在とその構成を明らかにすることである。

このため、本稿では、『ノート』に記された彼自身の研究プランに関する2つの覚書（「Q 1 プラン」および「Q 8 プラン」）と、これに関連する若干の獄中書簡とを手掛かりにし、それを実際の『ノート』執筆の経過と結果に照らして検討し、さらに、そうして明らかになった『ノート』の主題構成につき、その内的関連ないし内的論理を探ることにする。

この作業は、あくまで『ノート』全容解明の一環としておこなわれる。そこで、その全容解明に関する先行諸研究を踏まえ、本稿の課題に関連する限りで、その諸説についても若干の検討を加えたい。論述の順序として、まず先行諸研究をみておこう。

## 1. 『獄中ノート』全容解読への諸説

『ノート』全容解明に関する先学の研究には、その全容解明を正面から課題にすえて、それへの「分析仮説」ないし視点を提起したものとして、竹村英輔氏の論考と、松田博氏の論考とがある。竹村氏の論考は、氏の『現代史におけるグラムシ』（青木書店、1989年）に提示されているが、この著作についてはかつて筆者は短評をしたことがある。そこで、ここではそのなかから関連部分を抜粋することにより、竹村氏の議論を確認したい。

「著者は、公刊された『ノート』に接した時、これが「時代のイタリ

アの実に個別具体的な諸事実の無数の考察から始まっていた」ことに、「なにほどこかの衝撃感」を抱いたと「はじめに」で述べている。理論家グラムシという従来の画像からすれば確かに意外であるからである。哲学・知識人・政治等の理論的考察は、獄中第Ⅱ期に集中していた。だが『ノート』の執筆はそこで終わらず、再び個別具体性の次元にたち返り、文化論諸領域を中心とする第Ⅲ期が続く。これは何を意味するか？旧来のグラムシ像との偏差は？著者の「分析仮説」は、ここから出発し、この三期の「波動」の分析を通じて得られたものである。それは、次の諸点からなる。

すなわち、①『ノート』は、「個別具体的な諸考察と、抽象度の高い理論的次元の論題に関する諸考察とが、時期により重点を移し、交替」するという「二重構造」をなしている、②第Ⅱ期の理論的考察は、「第一期に論じた諸事実を整理し理論化するうえで、既存の論理的枠組みを検討し組たてなおす必要」による、そして、③第Ⅲ期への「転回点」が、マルクスとレーニンに示唆をえて「歴史的・民族的に異なる社会の文化表現に現れる思考の諸原理をいかに批判的・歴史的に摂取し得るか、を解決する」「方法的基準」としての「哲学的科学的言語の翻訳可能性」についてのQ11（Qは『ノート』番号を示す）最終部での考察にあり、したがって、④従来軽視されがちであった第Ⅲ期の具体的な諸考察を、第Ⅱ期の「実践的・理論的帰結の、歴史的に生きた内容」すなわち「政治——陣地戦——の内実そのもの」あるいは「知的道徳的改革の内実」の継続的探究として理解し、もっと重視すべきである——この四点である。

.....

およそ以上のようにして本書は『ノート』全容をはじめて主題化したことが、そこから明確にされたもっとも重要な点は、グラムシ思想の特殊イタリヤ的ナショナリティということであろう。著者は言う。「知識人論

として『獄中ノート』を再読することは、したがってこれを総じてイタリア史の脈絡に据えて理解することを必要とさせる」。このことは、グラムシの著作をイタリアの歴史と文化から分離し、取り出した“一般概念”にかれの考察の具体性を還元するという従来のグラムシ論に見られた傾向の最終的清算を迫るものである。残存する政治と文化の分離傾向を含め、こうした解釈上の諸傾向が、実はエイナウディ社刊旧版の編集上の問題点にも困っていることが明らかにされている（第Ⅳ部）。

だが同時に、著者は、理論的探究部分の固有の意義をいささかも軽視していない。逆にこれを重視するために、①獄中におけるマルクス文献精読の事実と意義を明るみに出し、②前記「翻訳可能性」に多大な注意を向けるだけでない。さらに「グラムシ自身を『翻訳し得る』」作業までも提起する（第Ⅳ部）<sup>2)</sup>。

松田氏の論考は、氏の「『獄中ノート』校訂版研究の意義と課題」に著されている。そこでの氏の議論は、上記竹村氏と共通する面もあるが、かなり鋭い対照性をなしている。この氏の論考についても、それについて筆者が当時発表した短評から該当部分を抜粋することにしたい。

「氏は…『獄中ノート』旧版（伊語問題別選集。合同版邦訳『選集』の主要底本）の「限界と不適切」（ジェルラターナ）に言及するのみならず、校訂版にも「限界と不適切」があると指摘され、校訂版の編者、ジェルラターナによる序文の解釈上の見地、すなわち、3期に区分される獄中期グラムシの思想展開は第2期に頂点に達すると見る「第2期頂点」説、およびQ 8（『獄中ノート』第8番。以下このように略記する）冒頭に記された研究計画を最終プランとみなす「Q 8プラン＝最終プラン」

2) 拙稿「書評・竹村英輔著『現代史におけるグラムシ』『季刊・思想と現代』19号、白石書店、1989年9月、130-131頁。

ン」説を批判する。松田氏によれば、第3期は、そこに「頂点」がある  
とまでは言えないが、Q8プランの枠に納まらない「新たな展開」であ  
り、したがってまた「Q8プラン」を「最終的」なものとしなせない。  
氏はそのことを詳述し、また竹村英輔氏の「分析仮説」（『現代史におけ  
るグラムシ』一九八九年）にもふれ、それを第3期「イタリア回帰」説  
と特徴づけて「同意しがたい」と否定する。松田氏において第3期は、  
Q8プランを踏まえつつも、それを越え「新たな『研究プラン』が胎動  
しつつある」「ヘゲモニー論の文化領域への展開」である。

.....

竹村氏のもう一つの強調点に、Q7冒頭における「マルクス文献精読  
の意義」があったが、松田氏は、むしろ、三〇年末の「討論中止」に象  
徴される第三インターとの政治的対立・断絶の事実を決定的に重視し、  
これを無視しては、第2期の理論的諸探究の「特別の」意義をつかみえ  
ないと強調する。『獄中ノート』の用語や文体の独特さも、ファシスト  
に対してのみならずスターリンから家族・友人を守るための「文体の闘  
い」であったとは、今回も注意を促される氏の強調点の一つである。

さらにQ8プラン問題に関連し、「アメリカニズム／フォード主義」  
の両契機のうち、「今世紀ヘゲモニー」の問題として次第に前者の比重  
が増していくということや、哲学領域では、旧版が与える印象と異なっ  
て、Q10「クローチェ批判」よりもQ11「ブハーリン批判」の方が「中  
軸的テーマ」をなすものであるという指摘などがなされているし、その  
他にもふれるべき論点は多いが、紙数がゆるさない<sup>3)</sup>。

みられるように、両者ともそれぞれなりに、①『獄中ノート』旧版（エイ  
ナウディ版＝問題別選集）の「限界」を指摘し、また②獄中第Ⅲ期の執筆を

3) 「グラムシ『獄中ノート』校訂版研究特集を読んで」『季報唯物論研究』68号、23  
巻・春、1999年5月、111-112頁。

重視している。だが、この重視の仕方が異なっている。竹村氏において第Ⅲ期は、第Ⅱ期の理論的探究から生ずる「帰結の歴史的に生きた内容」、「政治——陣地戦——の内実そのもの」、「知的道徳的改革の内実」の継続的探究としての個別「具体的な諸考察」であるが、松田氏においては、第Ⅱ期からの継続的探究ではなく、Q 8 プランを越えるような「新たな『研究プラン』が胎動しつつある」という点で特別に注目されるべき時期である。しかしそれにもかかわらず、その内容として松田氏のいう「ヘゲモニー論の文化領域への展開」という把握は、竹村氏のいう上記のような、個別具体的な文化論領域を中心とすると解された「歴史的に生きた内容」、「陣地戦——の内実」という把握と、事実上はさほど変わらないようにも筆者には見える。

とはいえ、両者は鋭い対立を示すのも事実である。①竹村氏の分析仮説「二重構造」論は、「イタリア回帰」説として拒否される。②竹村氏は、『ノート』全体に関して、その「発想と基調」がQ 1 に始まっているところの、「イタリア史の脈絡」での「知識人論として『獄中ノート』を再読する」という主題のとり方を示すのに対して、松田氏は、むしろ執筆モチーフに焦点をあてて（特殊イタリア史の脈絡を越える）第三インター批判として読む。この相違は、第Ⅱ期に集約される理論的探究の理解の仕方において、③竹村氏は「マルクス文献再読の意義」を強調するのに対して、松田氏は、むしろ獄中の同志たちとの30年末の討論中止という事実をとりあげる。そして、第三インターにたいするグラムシの関係を「対立」から「断絶」に到る過程として見る立場から、それを無視しては第Ⅱ期の理論的探究の「特別」の意義をつかみえないと強調されるのであった。

両説については、のちに再び再考するが、両説とも『ノート』全体の主題構成いかんという問題について、特には提起していない。そこで本稿は、この問題を主題にとりあげるのであるが、以下にこの問題を検討していこう。

## 2. 獄中研究プランの展開

獄中の研究プランに関する覚書には、Q 1 プランとQ 8 プランとの2つがあることについてははじめに記した。前者は、Q 1 冒頭に記されたプラン(1929年2月8日の日付がある)であり、後者は、Q 8 冒頭であらためて立て直したプランである。また、関連する若干の獄中書簡とは、タチアーナ宛の手紙3通である。そのうち最初の手紙は、1927年3月19日付、次は1929年3月25日付、最後は30年11月17日付、である。これらを便宜上、それぞれその執筆年次をとって、LT27, LT29, LT30, と略称することにする。なお、これらに加えて同じくタチアーナ宛の31年8月3日付手紙にも止目する。以下これらを日付の順に見ていくが、Q 8 プランについては、その執筆推定時期が未確定である。ジェルラターナ版(校訂版「編者序文」)では、1931年末と推定されていたが、フランチョーニは、異説をたて、1930年11-12月と推定している<sup>4)</sup>。ここでは、フランチョーニ説を採用するが、その理由は行論の過程で明らかになるであろう。

### (1)LT27 (1927年3月) —— 前史的構想

LT27は、『ノート』執筆開始が1929年2月であるので、その2年ほど前に記されたものである。またその後のプランの内容と対比しても、これは前史的構想と見なすべきであろう。とはいえ、竹村氏の言う『ノート』の「発想と基調」をうかがううえでは、それが、むしろここにすでにより端的に現れていると思われるゆえに、無視できない記述であると筆者には思われる。

このLT27では、「永遠のため」の「とらわれない」探究への志向が表明されて、その研究のテーマとして次の4題が記されている。

---

4) Gianni Francioni, *L'officina gramsciana*, Bibliopolis, Napoli, 1984, p.142.

- (1)「前世紀のイタリアにおける公共精神の形成についての研究。言いかえれば、イタリア知識人、その起源、その文化諸潮流による諸グループ、そのいろいろな思考様式、等々についての研究」
- (2)「比較言語学の研究」,
- (3)「ピランデッロの戯曲と、ピランデッロが代表していた、そして、彼のおかげで決定的となったイタリア人の演劇趣味の変化とについての研究」,
- (4)「付録小説と、文学における人民的好尚とについての試論」<sup>5)</sup>

みられるように、この4題は総じて文化—知識人論的な発想を表しており、またその枠内に収まるものである。この手紙において、グラムシは、この4題につき、「実は、この四つの論題のあいだにはある等質性が存在します。その発展のいろいろな局面と段階における民衆の創造的精神が、これらの論題の基礎に同じ程度にあるのです」<sup>6)</sup>と書き添えているが、これは、その後『ノート』全編を貫く根底的なモチーフを表す言葉として銘記しておくべきであろう。

## (2) Q 1 プラン (1929年2月)

グラムシにノート執筆の許可が下されるのは、1929年1月であり、実際に執筆が開始されるのは2月8日と見られる。Q 1の最初の頁に記されるのは研究プラン(Q 1プラン)であるが、そこにその日付けが書き込まれているからである。そのQ 1プランは、次の通りである。

5) Antonio Gramsci, *Lettere dal carcere*, a cura di Sergio Caprioglio e Elsa Fubini, Einaudi, Torino, 1965 (以下, *Lettere* と略記する), pp.58-59. 大久保昭男・坂井信義訳『グラムシ獄中からの手紙・愛よ知よ永遠なれ』第1分冊, 大月書店, 1982年 (以下, 『手紙』と略記する), 72-73頁。

6) *Lettere*, p.59. 『手紙』第1分冊, 73-74頁。



「覚書とメモ

主要論題

(1)歴史と歴史叙述〔storiografia=歴史学方法論・实际的な歴史研究の方法〕との理論

(2)1870年までのイタリア・ブルジョアジーの発展

(3)イタリア知識人諸グループの形成。展開、態度

(4)『付録小説』の民衆文学とその持続的人気の理由

(5)カヴァルカンテ・カヴァルカンティ。神曲の構造と技巧における彼の位置

(6)イタリアとヨーロッパにおけるカトリック行動の起源と展開

(7)フォークロア〔民間伝承〕

(8)獄中生活の経験

(9)南部問題と島嶼問題

(10)イタリア人口についての研究。その構成、移民の機能

(11)アメリカニズムとフォード主義

(12)イタリアにおける言語問題。マンゾーニとG・I・アスコリ

(13)『常識』((7)を参照せよ)

(14)標準型諸雑誌。理論誌、批評的・歴史的雑誌、一般的文化(普及的)

誌

(15)新文法学派と新言語学派(「この円形の机は正方形である」)

(16)ブレシャーニ神父の末流。」「傍点の箇所の原文はイタリック」

これをLT27と対比させれば、著しくテーマが多様化し、その範囲が一挙に拡大されていることが知られるが、相違はたんに量的であるだけでない。探究すべき課題について改めて正面から考えなおして立てられている印象を呈し、ある種の緊張感さえうかがわせるようなものへと質的な変化を示しているといえよう。この変化の背後にあるのは何であろう。おそらく獄外情勢

の展開であろう。国内的にはファシズム独裁のバチカン（ローマ法王庁）への接近とその抱き込みの進展がある（1929年2月11日、ラティラノ条約成立）が、特に決定的なのは、1928年ころから次第に明確になっていくコミンテルンにおける政治路線の〈左転換〉であろう。これは、ネップ期のソ連滞在を通じてみずからの政治思想を新しい段階へと展開させてきたグラムシにとっては、きわめて重大な意味をもつ。この〈左転換〉は、1932年、ドイツにおけるナチズムの脅威の切迫下、反戦反ファシズム運動の国際的高揚が起こるころまで続き、1933年1月、ナチズム政権成立の衝撃下でようやく再考されはじめる。この33年3月、グラムシは、二度目の重大な発作をおこし、獄中第Ⅱ期を終える。第Ⅲ期の執筆は、移送されたフォルミアの医院で身体の崩壊状態のなかで綴られるものであり、『ノート』執筆の第Ⅰ期、第Ⅱ期は、まさにその全期間が〈左転換〉の時期にあり、その時期に『ノート』の大部分が書かれるのである。

こうしたことから第三インター批判は、『ノート』執筆の当初から問題意識にあったと考えねばならないであろう。それがQ1プランの緊張感にも反映していると思われる。

また「一般的理論問題」の課題設定も当初から、しかも筆頭のテーマとして設定されていたことを示す事実が、前記引用の(1)の記述、すなわち「歴史と歴史叙述との理論」にほかならない。この「歴史の理論」とは「史的唯物論」のことである。また「歴史叙述」とは、引用文中に注記したように、原語では〈storiografia〉であるが、それは「歴史学上の方法論」をも意味する語であって、ここでは、実際的な歴史研究の方法論、端的に歴史方法論を指す。

この史的唯物論と歴史方法論という理論問題は、LT27にはなかったテーマであるが、もう一つ新たに登場した重要テーマは、(11)の「アメリカニズムとフォード主義」（以下、AFと略記する）である。その他の諸テーマは、大部分、大括りには、LT27の展開、詳細化として解することが可能なもの

であり、端的に、イタリア史の脈絡における最広義の「知識人史」のテーマに包括されるであろう。そうだとすれば、主要なテーマは3題、すなわち(1)「歴史と歴史叙述との理論」、(2)イタリア知識人史、(3)A Fの3題となる。

### (3)LT29 (1929年3月)

そのことは、Q 1 プラン執筆の翌月に書かれた LT29において次のように記されていることから確認することができるであろう。それは、Q 1 プランのグラムシ自身による要約であると解される。

「主として次の三つの論題に取り組み、ノートをとることに決めました。(1)19世紀のイタリアの歴史、とくに知識人諸グループの形成と展開に関心を向ける。(2)歴史と歴史叙述との理論、(3)アメリカニズムとフォード主義。」<sup>7)</sup>

本稿の主題にとって重要なことは、この3題は、『ノート』執筆の最後まで継続することである。

なお、この手紙においてグラムシは、上記(2)に関連して、「歴史の理論については、最近フランスで出たブハーリン『史的唯物論』」<sup>8)</sup>〔仏語翻訳書〕を差し入れてほしいとタチアーナに請求していることを付言しておこう。

### (4)LT30 (1930年11月17日)

その1年と9ヶ月ののち(獄中第I期の半ば過ぎ)、LT30においてグラムシは、研究プランをあらためて立て直したことを告げるように、次のように書いている。

7) *Lettere*, p.264.『手紙』第2分冊, 20頁。

8) *ibid.*, pp.264-5. 同上。

「私は三つないし四つの主要な論題を選びました。その一つは、イタリア知識人が1700年代までもっていた世界主義的機能という論題で、この論題はあとで多くの部分に分かれます。すなわち、ルネサンスとマキアヴェルリ、等々、がそれです」<sup>9)</sup>。

このように「三つないし四つ」と言われているが、それが何であるのかは「その一つ」(知識人史)しか示されていない。あとの二ないし三のテーマは何であろうか。おそらく、それは全体で「三つ」とすればA Fと、「歴史と歴史叙述との理論」(哲学と歴史方法論)であり、「四つ」とすれば、それに「マキアヴェッリ」(政治学)が加わるであろう。そうだとすれば、次にみるQ 8プランに合致する。Q 8プランでは、後述のように、事実上4題がテーマに挙げられているのであるが、形式としては知識人史「一つ」に一本化されており、しかもそれが「あとで多くの部分に分かれ」ているのである。このことが、Q 8プランの執筆時期を、30年11-12月とするフランチョーニ説を筆者が妥当とみなし、それを採用する理由の一つである。

#### (5) Q 8 プラン (1930年11-12月推定)

Q 8 プランでは、次のようにかなり大きく再編成されている。

「イタリア知識人の歴史のための断片的な覚書とメモ〔原ノートでは大文字〕

第1, このような覚書とメモの暫定的な——こころ覚え用の——諸性格。第2, これらからは、独立の試論数編が生まれうるであろうが、まとまった有機的一作品ではない。第3, 叙述の主要部分と副次的部分、『本文』にあたるものと『覚書』でなければならないもの、この両者の

---

9) *Lettere*, p.378.『手紙』第2分冊, 137頁。

区別はまだありえない。第4、問題はしばしば『第一次接近』といってよい未検証の主張があることである。すなわち、これらの主張のうちには今後の研究のなかで放棄されるかもしれないものがあり、ことによったら、反対の主張が正確なものと判明するかもしれないであろう。第5、上記の事情のために、主題の範囲の広範さ、曖昧さから、誤った印象をあたえてはならない。知識人についての寄せ集めの雑録、ありうべき想像上の『空隙』をすべて埋めようとする百科事典的作品を編集つもりは毛頭ない。

主要な試論：一般的序論。1870年代までのイタリア知識人の発展。さまざまの段階。——付録小説の民衆文学。——フォークロアと常識。——文章語と諸方言との問題。プレッシャーニ神父の末流。——宗教改革とルネサンス。——マキアヴェッリ。——学校と国民教育。——世界大戦までのイタリア文化におけるクロッチェの位置。——リソルジメントと行動党。——民族的修辞学の形成におけるウーゴ・フォスコロ。——イタリアの演劇。——カトリック行動の歴史。——全一派カトリック教徒、イエズス会、近代主義者、——中世のコムーネ、国家の経済的—同業組合的局面。——18世紀までのイタリア知識人の世界主義的機能。——イタリアにおける文化の国民的—民衆的性格の欠如に対する反動、未来主義者。——単一学校、および国民文化の組織全体にとってそれが何を意味するか。——イタリア知識人の性格の一つとしての『ロリア主義』。——イタリアのリソルジメントにおける『ジャコバン主義』の不在。政治の技術者および統合的ないし実地の政治家としてのマキアヴェッリ。

付論：アメリカニズムとフォード主義。〔傍点の箇所の原文はイタリア  
ク。原ノートではこのあと改頁〕

## 素材〔materia〕の集群化

第1「知識人、学校問題」

第2「マキアヴェッリ」

第3「百科全書的知識と文化の諸論題」

第4「哲学研究序論と、一つの社会学の民衆用教程への批判的覚書」

第5「カトリック行動の歴史。全一派カトリック教徒－イエズス会士－  
近代主義者」

第6「知識百般に通ずる各種覚書の雑録（過去と現在）」

第7「イタリアのリソルジメント」（オモデーオの『イタリア・リソ  
ルジメントの時代』の意味で、ただしごく厳密にイタリア的な諸  
要因を力説して）

第8「ブレシャーニ神父の末流。民衆文学」（文学に関する覚書）

第9「ロリア主義」

第10「ジャーナリズムについてのメモ」〔鍵括弧内の原文はイタリッ  
ク〕

これがQ8プランである。抜本的なまでに再編されており、いわば〈基本  
構想〉と実際のな〈作業計画〉とに分けられている<sup>10)</sup>。後者は、「素材の集

10) じつはこの点については、フランチョーニの捉え方はまったく異なる。彼の場合、  
「Q8プラン」は本稿のいう〈基本構想〉部分のみを指し、同じく本稿のいう  
〈作業計画〉部分は、〈基本構想〉執筆の約1年半後、つまり1932年3－4月に  
（放棄された「Q8プラン」に替わるものとして）執筆されると推定しているから  
である。だが筆者としては、(1)たとえ〈作業計画〉が「Q8プラン」とは別に、  
その後を立てられたとしても、上の執筆時期はあまりに遅いという印象を拭えな  
い。彼の推定によっても、32年4月には、クローチェ批判の集中的執筆がすでに  
始まっている。また、(2)「Q8プラン」執筆の推定時期30年11－12月ころにも、  
〈基本構想〉にはない哲学的テーマの執筆が併行執筆されており（特にQ7「哲  
学メモ。唯物論と観念論。第2シリーズ」）、その時期にこのテーマを含まない  
「プラン」が立てられたとはさわめて考えにくい（以上に関するフランチョーニ  
説については、Francioni, *op. cit.*, 特にpp.138-144, 参照）。本稿では、こうし  
た疑問から、さしあたり、「Q8プラン」の2部分を一体として捉えている点に  
限っては、ジェルラターナ（校訂版「編者序文」）の見解を踏襲していることに  
なるが、以上の諸点は筆者としてもなお今後の検討課題として残る。

群化」の部分を目指す、これは、これまでに書かれた、あるいは書き始めた無数の覚書をテーマ別に新たな問題別ノートに（配列を工夫し、補正も加えながら）再録、編集し、また書き下ろしも可能なかぎり追加していく計画である。実際にこの計画は実行されていく。

ここでQ 8 プランの構成に関して次の4点が注目される。

第1に、〈基本構想〉における基本テーマが、「イタリア知識人史」1本に絞られるが、そのかわり、このテーマの外延が歴史と文化に関するほとんどありとあらゆる諸テーマを包含するものへと著しく拡大されたことである。内容的に、その中心ないし基軸をなすのが「1870年代までのイタリア知識人の発展」史であろう。だから「知識人史」が「知識人史」を包括しているわけであり、この意味で自己包括的な複合的総体としての「イタリア知識人史」というきわめて包括的な大テーマがここに構想されたことになる。

第2には、しかし〈基本構想〉には、「付論」としてA Fが、そしてこれのみが位置づけられている。これは何を意味するのか。なぜ〈基本構想〉は、上の包括的基本テーマとA Fの2題から成るのか。そこに示される問題意識は何か。これは究明を要する一つの謎である。

第3は、〈作業計画〉における「第4」、つまり、これまで「歴史と歴史叙述との理論」と表記されていたテーマが、「哲学研究序論と、一つの社会学の民衆用教程への批判的覚書」と改題されていることである（「社会学の民衆用教程」とは、前出ブハーリンの『史的唯物論』の副題であり、これを指しているが、同時にここでは、グラムシ自身も「社会学の民衆用教程」つまり一般向け教科書＝普及書を出版する必要性を考えていることから、固有名刺でなく、〈un Saggio popolare di sociologia〉と一般名詞で記し、「一つの」と冠しているものと解される）。哲学的テーマの執筆が実際に開始されるのはQ 4からであるが、このノートにおける哲学的考察部分の最初の頁の冒頭に付けられた標題はすでに「歴史と歴史叙述との理論」とか、その類のものではなく、「哲学メモ。唯物論と観念論。第1シリーズ」と題されており、事

実、「歴史の理論」としての「史的唯物論」の問題領域のみならず、それを越えたより広い哲学的諸問題が考察の対象になっている。このことは、このQ4の執筆開始時期が、1930年5月と推定されており<sup>11)</sup>、丁度、獄中同志たちとの討論が始まるころであったことと無関係ではないであろう。つまり、第三インター批判の哲学次元からの遂行という問題意識の介在である。

第4は、むしろこれこそ第三インター批判と無関係でないと思われるのであるが、ともあれ、「マキアヴェッリ」(政治学〔政治の、科学と技術〕)という、哲学に次ぐもう一つの理論的テーマの新たな登場、独立論題化である。

こうしてみると、事実上もっとも重要なテーマ(領域)として4題が浮かび上がる。すなわち、①歴史と文化の諸問題をきわめて広範囲に包括する基本的・中心的大テーマとしての「イタリア知識人史」、②AF、③哲学、④政治学、の4題である。この4題がまさに「Q8プラン」に関して、「事実上4題」といったものであり、それが、既述のLT30での「三つないし四つの主要な論題を選びました」という言及に合致していることを確認しうであろう。またその手紙では、「その一つ」、「イタリア知識人が1700年代までもっていた世界主義的機能という論題」のみが記されていたことも、Q8プランにおけるその位置づけから理解することが可能であろう(Q8プランでは「1870年代まで」と変えているが)。

こうして『ノート』執筆は、「マキアヴェッリ」(政治学)を加え、第Ⅱ期にかけて理論的論述の比重を増していき、第Ⅲ期においては、Q8プランの「素材の衆群化」の(第Ⅱ期に問題別『ノート』が執筆される理論的テーマである第1、2、4以外の)諸項目にそって、多数の「素材」(覚書)が問題別の各『ノート』(フォルミア・ノート)に、新たな書き下ろしを若干加えながら、配置、再録、補正され、〈作業計画〉はそれとして実行されていく。

---

11) Francioni, *ibid.*



とはいえQ 8 プランは確かに「最終プラン」ではない。もっとも重要なことは、文化人としてのクローチェは論題に挙げられているが、彼の哲学理論そのものの批判、この意味でのクローチェ批判ないしクローチェ論が〈作業計画〉である「素材の集群化」の項目に挙げられていないことである。クローチェ批判は、1930年11月（獄中討論の中止の前月）、獄中にもたらされたクローチェ転換情報、つまり彼が公然たるマルクス主義批判の開始に踏み切ったという情報を得たのを契機にするが、その本格的な理論的批判は、1932年にはいってから集中的に展開されるようになる。しかし、Q 7「哲学メモ…第2シリーズ」の冒頭§ 1 Aが「ベネデット・クローチェと史的唯物論」と題する覚書であり、これが上記の論題「…イタリア文化におけるクローチェの位置」にそった内容をなしており、これ以後その論題からのクローチェ論が繰り返し現れるようになる。そして、このQ 7の執筆がまさに1930年11月から始まるとすれば、Q 8 プランの執筆時期が、この30年11月から12月までの間と推定するフランチョーニ説の方が、ジェルラターナ説（31年末）よりも妥当性が高くなるであろう。本稿が前者を採用するもう一つの理由が、そこにある。そのフランチョーニは、その後まもなくQ 8 プランも動揺し、結局放棄されることになるとみており、31年8月3日付のタチアーナ宛手紙における「もはや真の研究、作業計画はありません」<sup>12)</sup> という言及は、それを意味するのだと論ずる<sup>13)</sup>。グラムシ自身は、この手紙を書いた数時間後、最初の重大な咯血により、獄中執筆第Ⅰ期が終わる。

### 3. 四大主要テーマとその相互関連

#### (1)『獄中ノート』の四大主要テーマ

Q 8 プランが放棄されるとしても、その後、グラムシ自身によって新しいプランについて何事か語られたわけでもない。ここで重要なことは、たとえ

12) *Lettere*, p.459.『手紙』第2分冊, 217頁。

13) Francioni, *op. cit.* p.84.

未完のままに終わったとしても、遺された『ノート』最終形態・全29冊に照らしてみれば、上記の4題こそが『ノート』全体の主要なテーマ（領域）であったと認められうるのではないかと、いうことである。この4題を改めて確認すれば、①包括的大テーマとしての「イタリア知識人史」、②A F、③哲学、④政治学、の4題である。これをここでは、「四大主要テーマ」と呼ぶが、その4題は、『ノート』執筆過程において一時的・偶発的なものではなかった。前章でみてきたように、「知識人史」はLT27以来、また「哲学」と「A F」はQ1プラン以来、研究計画に関する言及につねに挙げられていた一貫したテーマであった。途中から、「政治学」（マキアヴェッリ）と「クローチェ批判」の2つの大きなテーマが浮上するようになるが、クローチェ批判は哲学のテーマを拡大・再編こそすれ、それと別のテーマではない。この哲学テーマの再編は、部分的には、政治学テーマの登場とも関わっている。というのは、「歴史叙述の理論」つまり歴史方法論の一部は、政治学テーマの領域に移されるからである<sup>14)</sup>。当初「歴史と歴史叙述との理論」と題されていたテーマが、既述のようにQ8プランで改題されるのも、このこととも無関係ではないであろう。

また、第Ⅲ期の執筆になる問題別特別ノート（フォルミア・ノート）のなかには、Q8プランの「素材の集群化」の項目に挙げられていなかった論題の『ノート』がある。それは、Q25「歴史の周辺（従属的社会諸集団の歴史）」（覚書8編）とQ27「フォークロアについての考察」（覚書2編）の2冊であるが、前者の8編はすべて、そのA稿がQ3、Q1に書かれたものであり、後者の2編は、いずれもQ1でA稿が書かれている。また、その後者の論題は、Q8プランの基本構想部分では、その「知識人史」のなかの特殊論題の一つ「フォークロアと常識」として挙げられているし、Q1プランにもあっ

14) たとえば、Q4 §38A「構造と上部構造の関係」は、歴史的・政治的分析の「方法論的規準 [criteri]」の考察であるが、そのC稿は、改題されてQ13（マキアヴェッリ・ノート）に移され、その §17C「情勢分析：力の諸関係」となる。

た。つまり、両者とも、まったく新たに浮かんだテーマではなく、むしろ、すでにLT27で言われていた「民衆の創造的精神」の「発展」という、『ノート』のあらゆる論題の「基礎」をなす問題そのものをより直裁に表すテーマであって、Q 8 プラン執筆以降、そうしたテーマとしてこの2題の考察を充実させるべく、論題として独立化させたものと解しうるであろう。なお念のためにいえば、両者とも、本稿のいう「四大主要テーマ」との関連においては、その外にあるものではなく、包括的大テーマとしての「イタリア知識人史」に包括される論題であるとみなされうる。

## (2)四大主要テーマ相互の関連と意味

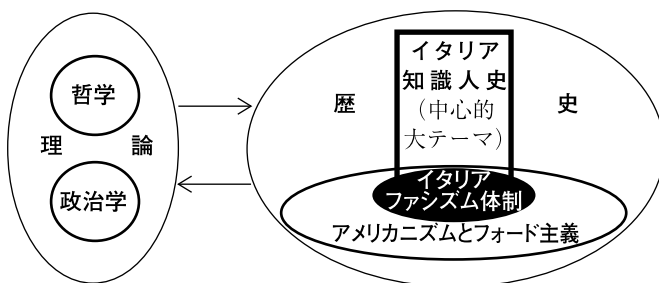
こうして、①イタリア知識人史、②A F、③哲学、④政治学の4題を『獄中ノート』の四大主要テーマとして識別、確認することができるなら、次には、その相互関連が考察されねばならない。

これに関わる問題としては、すでにQ 8 プランの基本構想部分につき、その構成要素がなぜイタリア知識人史とA Fとの2題なのかという「謎」を提起しておいた。といっても、その「謎」解きは、A Fの内容が(Q22『アメリカニズムとフォード主義』に見るごとく)、危機に瀕した欧州とその一部としてのイタリア、そして米国、さらに当時のソ連を含んで展開されつつあった新段階における工業化の諸問題、これを巡る第1次大戦後世界の考察であるという事実を押さえるならば、さほど難しくはないであろう。つまり、A Fの考察は、そのような当時の世界的空間を意味する空間軸にあるとするならば、イタリア知識人史は、文字通り歴史的な時間軸をなすわけである。そして、その両軸の交点に位置するのは、第1次大戦後世界におけるイタリアであり、ファシズム体制下のイタリアの「現在」にほかならない。まさに、この同時代の自国イタリアを捉えるためにグラムシは、リソルジメント・近代国家形成にいたるイタリア知識人の歴史にさかのぼり、それに探究の圧倒的比重を割きながらも、それにとどまることはできず、他方で同時代世界の

現実に視野を拡げなければならなかったのだ、と解することができるであろう。獄中のグラムシは、「現在を未来に投射される過去の総合、過去の全世代の総合として理解する」<sup>15)</sup> ことを重視するとともに、歴史とはつねに現代史であるというクローチェの有名な命題<sup>16)</sup>を批判的に継承し、また「展望」はインタナショナルだが「出発点」はナショナルだ<sup>17)</sup>とつねに考えていた。上記の四大主要テーマという主題構成は、このグラムシに、まことにふさわしい問題設定になっているといわねばならないであろう。

しかしながら、イタリア知識人史もA Fも、過去と現在という相違はあるもののいずれも経験的現実、現実の歴史（過去の歴史と展開中の歴史）に関する探究テーマである点では相違ない。これに対して、哲学と政治学とは、ほかならぬ「理論」次元での探究テーマである。したがってここに、理論と歴史（経験、現実）との問題設定の「二重構造」をわれわれもみることになる。図示すれば、図『獄中ノート』の四大主要テーマ」の通りとなろう。

『獄中ノート』の4大主要テーマ



15) Q12 §2C, p.1541. 合Ⅲ, 106頁。

16) クローチェ (羽仁五郎訳)『歴史の理論と歴史』岩波文庫, 1983年 (第1刷1952年), 参照。ちなみに、本訳書の底本の原題は、*Teoria e storia della storiografia* (歴史叙述の、理論と歴史)である。

17) cf. Q14 §68B, p.1729. 合Ⅰ, 200頁, 参照。

さらに考察をすすめるならば、その「理論」とは、哲学と政治学との2つであった。そうだとすれば、主要テーマ4題は、「哲学」と「政治学」と「歴史」（知識人史とAF）という形で捉えなおすこともできるであろう。この形は、実は、グラムシが『ノート』のなかで繰り返す「哲学－政治－歴史の同一性」という命題、奇しくもこの思想に合致し、あるいは、それを表現するものだ、ということにもなる。この思想は、クローチェの「哲学－歴史の同一性」という思想の批判を通じて打ち出されたものである。グラムシは、哲学のみならず、やがて政治学を固有の理論的テーマとして独立化させることによって、「哲学－政治－歴史の同一性」という彼自身の思想に照応する主題構成を成立させる結果となった。それがどの程度、彼自身に意識された思想の内的必然性の帰結であったのかはいまのところまったく定かではない。だが、『ノート』は未完であるとはいえ、この意味で、つまり主題構成の限りでは（または、その面でも）、みずからの思想をともかくも不足なく表現しうる地点には辿り着きえたのだ、といいうるのではないかと思われる。

#### 4. 先行諸説の再考

本稿の結論は以上の「四大主要テーマ」という点に存するが、そこから前述の竹村・松田両先学の『ノート』全容解明「仮説」ないし観点をみなおし、以下に多少なりとも、それらとの対比を通じて筆者の議論の詳細化ないし明確化をはかりたい。

##### (1) 竹村「二重構造」仮説について

竹村氏の分析仮説の中心は、「個別具体的な諸考察と、抽象度の高い理論的次元の論題に関する諸考察とが、時期により重点を移し、交替」という「二重構造」仮説であった。われわれも、「理論と歴史（経験、現実）との問題設定の『二重構造』」という意味ではその事実を確認したわけであり、

このかぎりでの竹村「仮説」は、その先駆的な問題提起であったといわねばならない。ただし、時期的交替という点に関しては、例えば、氏自身によって認められている通り哲学的探究がQ 4 から開始（1930年）されており、いくつかのノートが併行執筆されていること<sup>18)</sup>から、そのまま妥当するわけではない（この点は、私的会話において、竹村氏自身も再検討の必要性を認められ、控えめになられた）。松田氏は、この竹村「仮説」を「イタリア回帰」説として退けられたが、本稿はむしろ、この「仮説」には、『ノート』におけるグラムシの方法論を探ろうとする問題意識が込められていることを重視する。とはいえ、そこには検討を要する諸問題が潜んでもいる。ここでは、上記の問題点とは別に次の諸点を摘記しておきたい。

その第1は、竹村氏においては、『ノート』における理論的探究は、「第一期に論じた諸事実を整理し理論化するうえで、既存の論理的枠組みを検討し組立てなおす必要」によって生じたかに把握されているが、事実はすでにみてきたように、問題設定としては理論的テーマが、Q 1 の最初から（最初は「歴史と歴史叙述との理論」として）明確に位置づけられていたことである。それゆえにQ 1 の重要内容の一部をなす（竹村氏が重視する）イタリア近代国家形成過程（リソルジメント）における知識人の行動分析においても、そこには単に「個別具体的」な諸事象のみならず、同時に知識人分析における一般的な「方法的基準」についての諸言及が多数織り込まれているのである。こうした「方法的基準」こそ「歴史叙述の理論」に属する問題にほかならず、それはそれで「歴史の理論」についての問題意識とつながっている。

だが、そもそも竹村氏においては（というよりも、氏において「さえ」）、グラムシにおける「歴史の理論」と「歴史叙述の理論」（歴史方法論）との

---

18) 哲学ノート（Q 4, 7, 8, 10, 11）に限っても、かなりの部分が併行執筆されている。これを踏まえて「哲学メモ」の展開過程を精緻に跡づけようとする川上恵江氏の1998年（「グラムシと自律的文化の模索－『獄中ノート』第4ノートの構造－」『日本福祉大学研究紀要』98号第2分冊・竹村英輔教授追悼号）以降の、現在なお継続中の作業は、注目されるべきである。

位相の区別，その意味があまり捕捉されてはいないようである<sup>19)</sup>。氏が，氏の所説にしたがって第Ⅱ期から第Ⅲ期への考察の展開を「理論的抽象の次元から個別具体の次元へと“上向”」<sup>20)</sup>するものと特徴づけ，その「上向」への「転回点」として「科学的・哲学的言語の翻訳可能性」を特筆大書されるのは，グラムシにおける「歴史の理論」と「歴史叙述の理論」との位相の区別－関連という問題設定の未解説とつながっていると思われる。竹村氏の提示になる「翻訳可能性」論は，それ自体としてはきわめて興味深い論点への着眼であり，『ノート』解読上も重要な問題提起のひとつであるとはいえ，言われるような意味での「転回点」としては筆者には依然として解しがたい。

第2には，このような一連の問題を貫く基本的な問題点として，竹村氏におけるグラムシの「理論」の「抽象的理論」としての理解，つまり，グラムシの追究する「理論」そのものの具体性（理論における普遍的「真理」の「具体性」という弁証法）がなぜか理解されず，理論はつねに「抽象的」なものとする理論観，このある意味で常識的な理論観の地盤でグラムシの諸理論を理解するというかなり重大な問題点が存すると筆者には思われる。

竹村氏は，「第二期の考察こそ，“知的道徳的改革”の内実を盛る理論の器を形成している」<sup>21)</sup>と言われるが，これでは，グラムシの理論探究は，「内実」なき空虚な「器」，まさしくその種の「抽象的一般理論」形成の探究であるかのような印象を呈しよう。実際，氏はたとえば，マルクスの『経済学批判序言』と『フォエイルバッハ・テーゼ』に関して，「これらの諸規定を，

19) 竹村氏は，前掲『現代史におけるグラムシ』において，たとえば，「科学的・哲学的言語の翻訳可能性」に関するQ11848Cからの引用句のなかで，「実践の哲学」に「マルクス主義」，「歴史叙述理論」に「史的唯物論」という注記をほどこされている（51-52頁）が，グラムシにおいて「実践の哲学」とは「マルクス主義」（広義）も，その哲学・「史的唯物論」（狭義，「歴史の理論」）も指す用語であり，「歴史叙述の理論」は，その一般的な歴史方法論としての側面ないし位相を意味しているのである。本稿の注記24も参照されたい。

20) 竹村，同上，49頁。

21) 竹村，同上，214頁

グラムシは歴史・文化における一般的抽象の最先端に位置する規定として理解している」とか、「歴史『解釈』の基準（クローチェ『史的唯物論と経済学』）すなわち歴史・文化を考察する『思考』『認識』の基準…としてではなくて、『現実』の歴史…の…最高度の一般性をもつ抽象的諸規定と解していた」<sup>22)</sup>（傍点は原著）などと、その「一般性」のみならず「抽象性」をも繰り返し語られる。

だが、グラムシ自身において、理論は、哲学理論においてさえ具体的でなければならない。彼はブハーリン批判の文脈で言っている。「彼は、実践の哲学の概念を『歴史方法論』として練成することにも、歴史方法論を『哲学』、唯一の具体的な哲学として練成することにも成功していない」<sup>23)</sup>。このように「実践の哲学」はグラムシにおいて「唯一の具体的な哲学」なのである。だから「歴史方法論」（「歴史叙述の理論」）としても、その位相における独自の練成が首尾一貫して可能なのだと考えられているわけである。このことは、グラムシが「実践の哲学」という呼称を選んだことにすでに含意されていると考えられなければならない。「実践」とは、具体的＝現実的＝歴史的なものという品位をもつ概念であり、したがって「実践の哲学」とは、具体的＝現実的＝歴史的な哲学であることを意味するからである<sup>24)</sup>。

こうした点が明確に把握されていれば、上記の特殊な「転回点」といったものを設定する必要もなかったのではないかと筆者には思われる<sup>25)</sup>。

22) 竹村，同上，218頁。

23) Q11 §14C, p.1402. 合Ⅱ，173頁。

24) このことは、「実践の哲学」は前例のない「哲学」であることを意味する。それゆえグラムシは、「実践の哲学は、たんに以前の諸哲学を超克しているから…だけでなく…、哲学自体の構想の仕方を上から下まですっかり革新しているからオリジナルなのである」（Q11 §27C, p.1436. 合Ⅱ，211頁）ことを力説する。彼は、マルクスの「哲学廃棄」論をこのようにつかんでいる。この「実践の哲学」が二義を有し（広義にはマルクス主義、狭義にはその哲学）、その体系が、自己包括的な複合的総体系を構成することについては、拙稿「グラムシ諸概念の弁証法的構成」（『桃山学院大学社会学論集』第37巻第2号，2004年）を参照されたい。

25) 以上にみてきた竹村氏のグラムシ把握における問題点の基底には、本文に引用し



以上のような次第で、本稿でいう「理論と歴史」の「二重構造」における「理論」は哲学であれ政治学であれ、いずれも抽象的一般理論をめざしたもののとしてではなく、具体的な一般性、「具体的普遍」を追究した理論探究で

た「歴史『解釈』の基準（クローチェ『史的唯物論と経済学』）すなわち歴史・文化を考察する『思考』『認識』の基準としてではなく、『現実』の歴史の…諸規定」（傍点ママ）云々という箇所にも窺われるように、哲学上の「唯物論」をも「観念論」をも批判するグラムシをあくまで「哲学的唯物論」の枠内にとどめて解釈しようとする「無理」が潜む。このため竹村氏の哲学・認識論領域のグラムシ解釈論には晦渋さがつきまとい、厳密には誤りを含むことになる。たとえば上の引用句で、(1)「歴史解釈の基準」と「『現実』の歴史…の…最高度の一般性をもつ…諸規定」とが対立させられているが、この対置はよく考えれば無意味であり、グラムシの見地ではない。さらに、(2)「歴史解釈の基準」がクローチェのものとして述べられて、そのようなもの「としてではなく」と力説されているが、グラムシは、クローチェによる、哲学・世界観としての「実践の哲学」の「経験的基準」への還元を批判したのであって、グラムシの用語法において、そうした「経験的基準」と「歴史解釈の基準」とは同一でなく、質的な区別、すなわち、前者は「道具的」性格、後者は「認識論的」「方法論的」性格という相違する二次元が設けられている。これは「経験的事実」と「歴史の概念」との区別（Q10 II §41XVIC, pp.1327-8. 合II, 99頁）に対応しているが、それについては、下記注記も参照されたい。ちなみに、グラムシは「歴史解釈の基準」の必要性に関して次のように考えていた。「いわゆる『実践の哲学の社会学』も、ベルンハイムの本が歴史主義一般にしたがっているように、(1)この哲学にしたがわねばならず、つまり、歴史と政治の研究と解釈の実際の諸基準〔canoni＝根本諸原理・諸原則〕の体系的展覧〔esposizione〕とならねばならず、(2)直接的な判断規準〔criteri＝思慮・分別〕や批判的警告〔cautele〕などの収集、すなわち、実践の哲学により構想される限りでの歴史と政治の文献学であらねばならないであろう。古い歴史学の方法や古い文献学は、歴史の解釈や構成をまぎれもない独断論にしまい、多くは、無秩序に、しかも首尾一貫性せぬしかたで集められた粗雑な資料を、外面的に記述したりならべたりすることで、解釈や構成にかえているのだ」（Q16 §3C, p.1845. 合IV, p.273頁。(1)(2)は引用者注。なおこの初稿はQ4 §5）。ここで、(1)「歴史と政治の研究と解釈の実際の諸基準」とは、一般的な歴史方法論としての「実践の哲学」であり、(2)経験的に抽出（抽象）される「直接的な判断基準や批判的警告など」を「収集」し、これを適宜「道具的」に使用する「歴史と政治の文献学」とは次元が異なる。グラムシの「歴史叙述の理論」は、この(1)(2)という二次元構成において構想されている。「経験的基準」は、この(2)の次元に属するものであり、グラムシは、クローチェが「実践の哲学」をこの「文献学」次元に矮小化したことを批判し、逆にクローチェ歴史観こそ「経験的基準」（道具的価値）としてのみ意義を有すると論じたのである（cf. Q10 II §31C, p.1275. 合II, 73頁。Q10 II §41. XIII, B, p.1314. 合II, 72頁。Q10 I §12B, p.1235. 合II, 3256頁）。

あるという理解において把握されたものである。そのようなものとしての彼の一般理論と個別経験的諸事象、この両次元からなる「二重構造」の内的方法論的連関が探究されなければならない<sup>26)</sup>。『ノート』全容解明の鍵は、まさにその問題のなかに所在するのである。

## (2)松田「第三インター批判」強調説について

松田氏の『ノート』解読視点は、グラムシの第三インターとの政治的な「対立・断絶」、したがって政治的な批判が理論的な「対立・断絶」、批判へと「深化」していくことを強調し、そこから『ノート』全体を捉えようとするもので、獄中執筆第Ⅱ期の理論的探究を、その理論的な第三インター批判の展開として、第Ⅲ期については、Q 8 プランを越える「新たな『研究プラン』が胎動しつつある」時期として捉えて、第Ⅲ期の重要性を提起するものであった。その後、氏は、前出の筆者による短評に対してリプライを示されるだけでなく、氏自身の精力的な研究の成果をまとめ、新著『グラムシ研究の新展開—グラムシ像刷新のために』（御茶の水書房、2003年）を出版された。その第1章『『獄中ノート』校訂版研究の意義と課題』において氏の解読視点があらためて示されているが、そこでも、上記の解読視点が貫かれていることは勿論のこと、さらにより詳細に展開されている。そこで、この新

26) この問題を『ノート』内在的に解読する手がかりは、上の注記にもみえる「哲学」と「文献学」というグラムシ自身の方法論的「二重構造」そのものにある。彼は言っている。「実践の哲学が基礎をすえる経験は、図式化できないものである。この経験は、その無限の多彩さ、多様さにおける歴史そのものだからであって、その研究は、特殊諸事象の確証〔accertamento〕における博学〔erudizione＝博識〕の方法としての『文献学〔filologia〕』の誕生、そしてまた、歴史学の一般的方法論として理解される哲学の誕生に場所をあたえうる」（Q 11 § 25 C, pp.1428-9. 合Ⅱ, 162頁）。この方法論的「二重構造」は、上記注記の「歴史の概念」と「経験的事実」との区別につながっている。Q 1 プランの「歴史と歴史叙述学との理論」という表現は、この区別と関連し、さらにこれはまた、彼の「現実」概念におけ一般概念としての「realità〔現実〕」と「realità effettuale〔実際の現実〕」の区別、同様に一般概念としての「storia〔歴史〕」と「storia effettuale〔実際の歴史〕」との区別にもつながっているであろう。

著第1章から、本稿の議論に関わるかぎりで若干の論点をとりあげ、現時点における筆者の立場を明らかにしておきたい。

### 第Ⅲ期（フォルミア・ノート）の位置づけ

松田氏は、本稿第1章で示した筆者の短評へのリプライの意味もこめ、竹村氏に対する「第Ⅲ期＝イタリア回帰」説という氏の批判について、新著でよりくわしく再説され、「晩年の考察がたしかにイタリア近代史の多様な諸側面を考察対象とするものであることは異論はない」とされている。そしてそのうえで、「問題はそれらの多様なテーマが位置づけられる次元である」と提起され、それらが「近代ヨーロッパ史のなかに位置付けられ」、さらにA F（Q22）が念頭におかれて、「世界史的規模での20世紀的特質をもつヘゲモニー関係」<sup>27)</sup>といった国際的視野から考察されるにいたるという第Ⅲ期把握の仕方を提示されている。

これについて本稿の立場を述べれば、このような国際的視野は、視野としては『ノート』執筆の当初から、つまりQ1プランにおける論題A F設定の当初から存在していたのではないのかということである<sup>28)</sup>。既述のようにグラムシは、「展望」は国際的、「出発点」は一国的という二重の視点をもっていった。従来の第Ⅲ期把握を超えて当期における「新たなプラン」の「胎動」ないし「萌芽」を論定するためには、この点も踏まえたうえで、総体として第Ⅲ期にはどのような新たな変化、発展が、どの程度みられるのかが、より精密に解明される必要があると筆者には思われる。これはグラムシ研究共通の課題であろうが、松田氏においても、緻密な検証作業が現在着手されつつあるところとみうけられるので、その進展に期待したい。

27) 松田博『グラムシ研究の新展開－グラムシ像刷新のために』御茶の水書房、2003年、24-25頁。

28) さらにいえば、「国際的ヘゲモニー」という視点は、少なくとも1926年10月のロシア共産党中央委員会宛「手紙」に遡ることができると思われる。

### 「マルクス文献精読」の位置づけ

筆者の短評では、竹村氏が「マルクス文献精読の意義」（Q 7 冒頭における翻訳）を強調したのに対して、松田氏は「『討論中止』」に象徴される第三インターとの…対立・断絶」を決定的に重視したと両者を対照させた。これに対して松田氏は、「『マルクス文献のグラムシ的翻訳』のもつ重要性には私も異論はない」と応えられ、そのうえで、「グラムシはなぜ『マルクス文献精読』…の必要性を『ノート』執筆の過程で不可欠の知的作業と考えるようになったか」と問われ、これにつき、「グラムシの第三インター（コミンテルン）からの断絶がたんに政治的次元のものに止まらず『哲学』問題をも含む根本的な理論的断絶に深化し、その過程において『マルクス再考』というテーマが不可欠のものとして位置付けられるようになったというのが私の見解である」<sup>29)</sup>と回答されている。

第三インター批判として『ノート』を解説する氏の視点が一貫されているのであるが、そこでは、政治的批判の深化のみならず「『教義体系』そのものの理論的批判へと『移行』する」のは、つまり理論的な「根本的な批判」が開始されるのは、Q 4 からであるという理解も明確にされている。

本稿においても、既述のように、Q 1 プランでの「歴史と歴史叙述の理論」という哲学的論題設定が拡大再編されてQ 4 「哲学メモ」の執筆に向かうが、その執筆開始時期（1930年5月推定）が獄中討論の開始時期にあたり、このQ 4 での哲学的考察の開始に第三インター批判の哲学次元からの遂行という問題意識が介在しているとみており、このかぎりでは松田氏とそれほど違わない。獄中討論が中止されるのは、同30年12月であり、その直前にQ 8 プランが執筆されると本稿は推定しているが、Q 7 冒頭の「マルクス文献翻訳」がなされたのは、ほぼそのころ（同30年11月）のようである。

---

29) 松田、前掲、26頁。

### 「実践の哲学」の分裂の克服

しかしながら筆者の場合には、第1に、第三インターとのグラムシの理論的相違、特に哲学面での相違は、『獄中ノート』以前からのものであり、そもそもグラムシは、哲学的には一度として唯物論者であったことはないことを重視する。だから、「マルクス文献精読」においても、マルクスの哲学がもはや「唯物論哲学」ではないことを再確認し、その方向で解釈を深めていくというのが筆者の見方である<sup>30)</sup>。

第2には、Q4から始まる哲学的探究には第三インター批判の問題意識が介在しているのではあるが、しかし、その批判はグラムシの哲学的問題設定全体の一部、半面にすぎないということである。そのことは、「マルクス主義の二側面」と題するQ4 §3 Aに明らかである。そこでは、「マルクス主義」は「二重の修正」、すなわち一方では「若干の観念論的諸潮流」に吸収、合体され、他方『『公認』マルクス主義』においては「俗流哲学的唯物論の現代的派生物」（あるいはまた「カント主義のような観念論的諸潮流」）と結合されるというかたちで「二重の修正」をこうむってきたと把握されている。この覚書の第Ⅲ期推敲稿Q16 §9 Cでは、この「二重の修正」が「ヘーゲル主義に起こった分裂が実践の哲学にも繰り返された」という類比を介しても再把握され、考察がさらに深められている。このように、グラムシにとり、確かに『『公認』マルクス主義』（C稿では「正統派」。第二インターを含む）批判は、哲学的探究への一契機であり、またそれはそれとして最後まで貫かれるが、しかし問題全体からみれば、その一部、半面であり、「分裂」の片

30) グラムシは慧眼にもマルクスの「哲学廃棄」を看取しており、そこに哲学観自体の全面的革新をみてとっていた、といえよう（注記24、参照）。だから『ファイエルバッハに関するテーゼ』で言う「新しい唯物論」も、それを「哲学的」唯物論の表明とは解していない、というのが筆者の見解である。「史的唯物論」という普及していた呼称もグラムシはとりやめた。またグラムシみずからがその継承者と任じているレーニンについても、その哲学的著作（『唯物論と経験批判論』など）は哲学論としてはまったく評価していない。

割れ（「唯物論的」片割れ）として位置づけられているのであって、こうした彼の独特の問題認識に注目することが基本的に重要であるとするのが筆者の立場である。それゆえ、「マルクス文献精読」については、この「二重の修正」ないし「分裂」の克服、「実践の哲学」の現代的な再総合・自立的全一性の回復という企図<sup>31)</sup>のもとに、その原理・原典の再精査としてなされた、と筆者は解している。

第3には、しかも、理論的な水準や重量において『「公認」マルクス主義』より「観念論的諸潮流」の方がはるかにまさっており重いというのがグラムシの認識であった。したがって、上記の企図からすれば、後者の方がより重視されることになる。この「観念論的諸潮流」として上記Q 4 8 3では「(クローチェ、ソレル、ベルグソン等、プラグマチスト等)」と注記されているが、C稿では「ジェンティーレ」が補充されている。ともあれ、『ノート』における彼らに対する論究は、こうした他方の「観念論的」片割れに対する批判としての位置づけにおいてある。

#### 「失地回復の前提」としてのクローチェ

このうちクローチェに対する批判が特別に重視されたことは、それがやがて一論題として独立化すること（Q10）に表れているが、この場合にも、その重視の仕方につき、それが「実践の哲学」の「観念論的」片割れの批判的再吸収という上記の位置づけに沿っていることを看取することが重要である。グラムシは青年期から、クローチェ哲学を「実践の哲学の失地回復の前提になりうる」と考えており、それを想起しているQ10では、「実践の哲学の最初の理論家たちがヘーゲルの概念構成〔concezione〕に対しておこなったのと同じ変換〔riduzione〕を、クローチェの哲学的概念構成に対して再びおこなわなければならない。これは、実践の哲学の正当な失地回復をもたらし、

31) この企図は、Q 4, 7, 8 という哲学ノートの標題がすべて「哲学メモ。唯物論と観念論。第〇シリーズ」と題されていることにも表れている（Q 8 では原ノート51頁に標記されており、そこから哲学ノートが始まる）。

直接的な実践生活の必要性のために『俗流化』してしまっているこの哲学の概念構成を、闘争の今日的展開が提起している複雑きわまる諸課題の解決のために達しなければならない高さにまで引き上げる歴史的に実り多い唯一の仕方である」と記すにとどまらない。さらに「われわれイタリア人にとって、ドイツ古典哲学の継承者になるとは、クローチェ哲学の継承者になることを意味する。クローチェ哲学は、ドイツ古典哲学の現在の世界的モメントを代表しているのである」<sup>32)</sup>とまで書いている。

このように、実践の哲学の「失地回復の前提」はクローチェにあるというのがグラムシの青年期以来の一貫した認識であり、このグラムシにとり、「公認」ないし「正統派」マルクス主義は、まさに「俗流化」の水準にあるにすぎず、その最初の体系的な理論書であるゆえに槍玉にあげられるブハーリンの『史的唯物論』は、クローチェらと比較しうるものではないのであった。

第4に、したがって、クローチェ批判はQ10として独立論題になるが、ブハーリン批判は独立論題となりえず、Q10の一部に位置づけられているというのが事実であろう。それゆえにまた、既述のように筆者もQ10でなくQ11が「中軸」をなすとみるが、それは「実践の哲学」そのものが主題であるからであって、「ブハーリン批判」であるからではない。さらにいえば、Q11の「前提」に、いわば実践の哲学の「失地回復の前提」の検討としてQ10があり、両「ノート」はこうした関係において一体性をなすと筆者は捉えている。実際、グラムシの哲学的独創性は、クローチェ批判なしでは考えられえないであろう<sup>33)</sup>。

32) Q10 I §11B, pp. 1233. 合IV, 353頁。この問題認識には、グラムシ自身が青年期「傾向的にはクローチェ主義者であった」(*ibid.* 同上)ことが関わっており、1930年末、クローチェ転換情報に際会して以降、個人的にも「クローチェ哲学に決着をつけることが必要である」(*ibid.* p. 1234. 同上354頁)という自覚が切迫化したものと思われる。

33) グラムシの「絶対的歴史主義＝絶対的人間主義」や「哲学－政治－歴史の同一性」

### 第三インター批判の方位

第5には、以上の諸点から、グラムシの第三インターに対する理論的批判（ブハーリン批判）は、先の引用句でいえば、「闘争の今日的展開が提起している複雑きわまる諸課題の解決のために達しなければならない高さにまで引き上げる」こと、したがって第三インターが、その一員であった彼に可能な仕方、「直接的な実践生活の必要性」から離陸して「ヘゲモニー」段階へと自己超克することをめざすものであったと解することができるであろう。

このような理解からすれば、グラムシが第三インターに対してもっぱら「対立・断絶」を深めるばかりであったとは考えることができない。事実、およそ2年間中止されていた獄中討論も、1932年11月にわざわざ禁止の裏をかいて再開されている。彼にとっての第三インターとの間の対立は、矛盾ないし諸矛盾としてより深く複雑であったとみるほうがより真実に近いであろう。またそのようにみてこそ、崩壊しゆく身体にもかかわらず、その諸矛盾をまさに歴史的な「矛盾」として自己に背負ったグラムシの意思の超人的なまでの粘り強さと思想的な営為の複雑な深さとをより十全に測り知ることができるのではないか、と筆者には思われるのである。

### むすび

以上において本稿が明らかにしたことは、結局、①イタリア知識人史、②

---

という基本命題は、クローチェからの批判的継承物であり、その独創的「変換」の産物にほかならない。もっともグラムシの哲学思想は、その他に、ジェンティーレからは、マルクス（特に「フォイエルバッハ・テーゼ」）解釈における「実践」（行為、活動）概念と「生成」論の見地を批判的に摂取し、ラブリオーラから「マルクス主義」の自足的な自立性という理解の仕方を継承、貫徹しようとしたなど、その源泉を主要なものに限ってもクローチェのみには帰しえない。付言すれば、この哲学的3源泉がすべてイタリアの思想家であることを確認しておくのも無意味ではない。いうまでもなく、マキアヴェッリもイタリア人であった。つまり、彼の思想は、深く自国イタリアの思想史に根ざしていたのであり、竹村氏の強調がやや過剰であったとしても、やはり彼の思想の自国性（ナショナリティ）は、国際性との一体性においてつねに念頭におくべであろう。



A F, ③哲学, ④政治学の4題が、『ノート』の四大主要テーマ（領域）を構成しているということである。このうち、①がイタリアの歴史と文化の多様な諸問題を包含するきわめて包括的な大テーマであり、『ノート』全体の中心テーマをなすが、かといってその他は周辺的なテーマに位置づけられるものではけっしてなかった。①②が「歴史」的考察であるとすれば、③④は「理論」的考察であり、歴史と理論の「二重構造」をなす統一性を有しており、また、「哲学－政治－歴史の同一性」というグラムシ「実践の哲学」の基本命題に合致する主題構成でもあった。

それゆえに、そこで探究されている「理論」は、「抽象的一般理論」ではなく、理論としての具体性を有する一般理論であり、そのことは、「実践の哲学」という呼称に含意されていることについてもふれてきた。その「哲学」の探究を主題とする第Ⅱ期のQ10（クローチェ批判）とQ11（哲学研究序論とブハーリン批判）との関係については、確かに後者が「中軸」をなしているのであるが、論理的には前者を「前提」としており、この関係において両者を一体とみる見地が本稿の立場であった。

またその背後には、第三インター「マルクス主義」（ないし「正統派マルクス主義」）を、分裂した「実践の哲学」の「唯物論的」片割れとして位置づけ、むしろ他方の「観念論的」片割れの方を重視して、双方の理論的批判を遂行するという特徴的な批判の方法が存在することを示し、そこにおいてもマルクス「実践の哲学」の自立的全一性というグラムシ的概念の固有性が表れているとみる本稿の立場を明らかにした。

「そこにおいても」というのは、実は、『ノート』全体構成の「理論と歴史」という二重構造そのものが、すでにグラムシにおいては、この「実践の哲学」の自立的全一性の具体的表現としての意味を担っているからである（「理論と実践の統一」＝「哲学・政治・歴史の同一性」）。

この「全一性」は非絶対的な「全一性」であり、絶対歴史主義的な「全一性」であるが、これらの諸点をふまえながら、本稿で明らかにした「四大主

要テーマ」を分析仮説として、『ノート』全編にわたる考察の展開過程をあらためて検討し、その全体を貫く論理構造を深く解明していくのが、筆者の今後の課題となろう。

## The Main Subject of Gramsci's *Prison Notebooks*

Tomihisa SUZUKI

What is the main subject of Antonio Gramsci's *Prison Notebooks*? This work contains a large number of fragmental memoranda concerning his observations on various spheres.

This paper argues that *Prison Notebooks*' subject consists of four areas of study and that it is proven by the analysis of Q1 plan, Q8 plan and some his letters from prison. These four areas include the following: (1) history of Italian intellectuals, which is the central and comprehensive subject, (2) Americanism and Fordism, (3) philosophy, and (4) politics.

They demonstrate a dual structure of argument, that is, the first two areas are empirical (or historical) studies, and the latter two areas are theoretical ones. In this sense, Gramsci succeeds in unifying empirical (or historical) and theoretical observations. On the other hand, one can point out that this construction is equivalent to the identity of philosophy-politics-history, which Gramsci repeatedly stresses in his *Notebooks*.

Key words: *Prison Notebooks*, history of intellectuals, Americanism and Fordism, philosophy, politics